

平成 22 年度大学院修了式 学長告辞

去る 3 月 11 日午後 2 時 46 分に M9.0 の東北地方太平洋大地震が発生し、それに伴って発生した津波による被害を含めると、死者・行方不明者 22,000 人以上となり、日本の歴史上未曾有の大災害になりました。東北関東大震災による被災者の皆さまにお見舞い申し上げます。国の内外からの支援の輪が広がっており、香川大学においても教職員はもちろん学生諸君も義援募金活動に加わってくれております。一日も早い復興を願っておりますが、東日本の復興は 21 世紀に生きる私たち日本人の新たな課題であり、目標であると考えております。

本日、ここに多くの関係者の出席のもとに平成 22 年度香川大学大学院の修了式が行われることは我われにとって大きな喜びであります。大学院の博士前期・後期課程と修士課程の修了生、さらに論文博士の学位を授与された方の総数は 271 名であります。博士の学位を授与された 19 名、修士の学位を授与された 206 名、専門職学位を授与された 46 名の皆さん、ほんとうにおめでとうございます。心からお祝申し上げます。

修了生のなかには海外からの留学生 18 名が含まれています。留学生にとっては、日本の文化や習慣への適応という課題を乗り越えての成果であり、その努力は並大抵のものではなく、改めて敬意と祝意を表したいと思えます。また、香川大学、愛媛大学、高知大学で構成する愛媛大学大学院連合農学研究科博士課程において、本学教員の指導を受けた 2 名に去る 3 月 17 日に博士の学位が授与されたことを申し添えておきます。

修了生諸君の勉学と研究に対するたいへんな努力と熱意が大きな成果となっ

て実を結んだことを君たちと共に喜びたいと思います。また、学生諸君の指導に暖かい情熱を持って当たってこられた指導教員の方々に心から敬意を表します。

さて、君たちは大学院課程を修了し、社会で活躍するか、さらに進学する人もいることでしょう。大学院、特に博士課程は、かつて研究者やアカデミズムの後継者の養成を中心に考えられてきました。しかし、博士号取得者の社会における役割も大きく変わってきています。また、変わらなければなりません。欧米では、かなり以前から博士号取得者が、科学の分野はもちろんですが、行政、政治、企業経営、外交、文化、芸術を含めたあらゆる分野において、博士の学位を取得した人たちが活躍しています。本日の博士号取得者から、行政や企業経営などの分野で活躍する人が一人でも多く輩出することを願っております。

高度成長時代には、日本の社会では組織の歯車として機能する人材が求められ、西欧の科学・技術をまね、ものづくりに活かしていくことが重要視されてきました。しかし、近年の社会を見れば、その動きはたいへん激しく、そのスピードは想像以上に速いというのが実感であります。日本の社会も大きく変わらなければ、世界から取り残されるのではないかという不安を感じているのは、私だけでなく、多くの人たちの想いです。

君たちが大学院の課程において博士論文や修士論文としてまとめ上げた研究成果は君たちの努力の結果であり、宝でしょうが、それ以上の大きな宝は学位論文をまとめる過程で培われた探究力、解析力、表現力、見識であり、さらには今後も継続して学習することの重要性を学んだことでもあります。研究の過程で君たちが得たそれらの能力は、社会のどのような分野においても求められる資質であり、研究者だけでなく、行政や企業経営の分野に進んだとしても活かさ

れるものであります。君たちは修士論文か博士論文を通して、学問や科学技術が創造される瞬間を経験してきたはずで、君たちの力が科学・技術や地域社会の明日を拓くことを期待しております。

学術研究の分野では今日は最先端であっても、明日には最先端ではないことがしばしばあります。君たちは大学院課程における研究活動を通して、科学は常に動いていることを、それも分野によっては毎日のように動いていることを実感したと思います。これらのことは、継続的な学習と努力が将来にわたって必要であることを我われに教えています。

博士の学位を手にした諸君は、実験や文献調査に昼夜を忘れて取り組んだことや実験結果に対する指導教員とのディスカッションのこと、さらには期待するような研究成果がなかなか得られず、苦しい毎日を送ったことを思い出しているかも知れません。しかし、今日ここにいる君たちは、それらの苦難を自分自身の力で乗り越えました。研究成果を学会で発表し、学会誌などに投稿し、それらを君たち自身の手で集大成し、学位論文としてまとめあげたのであります。その成果として博士という学位を手にすることができましたが、君たちの将来にとって、もっとも大きな成果は「人生に対する自信」を得たことではないでしょうか。この成果は、君たちのこれからの人生にとってもっとも活かされるものであります。

私は、君たちが大学院の課程において、人生に対する自信と探求力という2つのものを得たと言いましたが、それらは変わらないものでは決してありません。自信は継続的な努力に裏打ちされないと、残念ながらその力を発揮できません。また、探求力も放って置けば、その能力は次第に低下し、日常的なスキルアップが必要です。君たちは、今までとほぼ同じ分野や少し違う分野、さらには今までの専門とはかなり違う分野で活躍することが期待されています。私は、君たち

が明日から置かれるであろう新しい環境のなかで最善の努力を継続され、人生に対する自信と課題探求力を社会で大いに活用されることを何よりも期待しております。

さて、日本の社会では、少子高齢化をはじめ、高度情報化、国際化が急速に進んでいますが、社会保障への不安、環境劣化、経済活性化、安全・安心の確保など、多くの課題が生じています。一方、国際社会においては、グローバル化に伴う国際競争の激化や地球環境の劣化、食料不足、エネルギー不足、地域紛争などの課題が顕在化しております。このような課題を乗り越えるための知恵をどのように生み出し、どのように実行するかが問われております。課題を解決するための知恵を出すのは、学術研究に係わる者の社会的使命でもありますが、柔軟な発想と新しい視点を持った若者の挑戦が期待されています。未知の分野に対して、地球的視野で考え、自らの課題として捉え、積極的に取り組めるのは、君たち若者の特権であり、喜びであると思います。私は、君たちの挑戦に大きな期待を持っています。

世界には科学技術と社会科学が一緒になって解決しなければならない課題がたくさんあります。21世紀がかかえる様々な課題に新しい視点で挑戦し、解決の方法を提示できるのは君たちのような若い研究者の特権であり、喜びであると思います。私は、君たちの挑戦に大きな期待を持っています。

本日学位を取得された諸君が、新しい環境のなかで努力を継続し、大きな花を咲かされることを期待し、告辞いたします。

平成 23 年 3 月 24 日

香川大学長 一井眞比古